



Title	奈良県王寺町方言の従属節に現れる「カシテ」
Author(s)	山上, 尊
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2015, 13, p. 72-81
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51433
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

奈良県王寺町方言の従属節に現れる「カシテ」

山上 尊

【キーワード】 奈良県王寺町方言、カシテ、複文、不確定性

【要旨】

本稿では、奈良県王寺町方言にみられる「カシテ」を取り上げ、生起のあり方や意味・用法についての記述を行う。結果、「カシテ」については以下にまとめられる。

- A) 「シテ」は必ず「カ」とともに「カシテ」の形で現れ、接続助詞「から」や準体助詞「ん」、「おかげ」「せい」「つもり」という形式名詞に後接する。
- B) 「カシテ」は、主節の背景にある事態には複数の候補があり、また従属節事態と主節事態とのつながりが不確定であると話し手が捉えていることを示す。
- C) 「カシテ」は、話し手が不確定性を念頭に置きながらも、ある1つの事態を選んで、背景事態として提示していることを示す。
- D) 「カシテ」は聞き手に何らかの行動をすることを期待せず、あくまで「不確定性の表出」という点に重点を置く。

1. はじめに

奈良県北葛城郡王寺町^{きたかつらぎぐんおうじちょう}で話されていることば(以下、王寺町方言とする)には、「カシテ」という表現が存在する。「カシテ」は、複文の従属節末に現れる。

- (1) わたしのせいカシテ、あの子怒って帰ってもうた。(怒って帰ってしまった。)
- (2) 花子のそういうところがかわいいんカシテ、太郎は花子と付き合ってる。
- (3) 今日は休講やと思ったんカシテ、彼は授業にけえへんかった。(来なかった。)

「カシテ」が現れる複文は、従属節が主節の背景にある事態を述べており、かつその因果関係が不確かなものである。上記の例(3)でいえば、この話し手は「彼が授業に来なかった」理由が「彼が休講だと思った」ことにあるかどうかははっきりとはわかっていない。

したがって、以下のような場面では用いることができない。

- (4) (雨に濡れながら帰ってきた子供が、家で迎えてくれた母親に向かって)
#急に降ってきたからカシテ、びしょ濡れやで。

話し手にとって、自分がびしょ濡れになってしまった理由が「急に雨が降ってきたこと」であるのは明確である。このように、主節と従属節の因果関係が明らかな場合は不適格となる。

筆者が調べた限り、これまでにこのような「カシテ」を記述した研究はないようである¹⁾。

1) 『日本方言大辞典』には、「か」の下位項目として「かして」が掲載されており、青森県三戸郡を使用地域として、「そだべがして(そうかしら)」という例文が挙げられている。2節で述べるように王寺町方言の「カシテ」は複文の従属節にしか生起しないため、これと

本稿は、現在のところ明らかにされていない王寺町方言の「カシテ」について、その生起のあり方および意味を詳細に記述することを目的とする。

本稿における用例は、主に筆者²⁾の内省によるものである。例文には王寺町方言を用い、共通語訳が必要と思われる箇所には訳をつける。また、「カシテ」のみをカタカナで表し、その他は漢字かな混じりで表記する（ただし、引用を除く）。「*」はその文が文法的に不適格であることを示し、「#」は運用的に不適格であることを示す。「?」はその文が不自然であることを示す。「?」の数が多いほど、違和感の度合いが高いことを表す。したがって「?」が付された文よりも「??」が付された文のほうが座りが悪い。

参考のため、以下に王寺町周辺の地図を付ける。黒く塗りつぶされている部分が王寺町である。王寺町が属する北葛城郡は奈良県の北西部に位置し、他に上牧町・広陵町・河合町を含む。北は生駒郡と接し、西は大阪府と接している。王寺町は中でも西部に位置する。

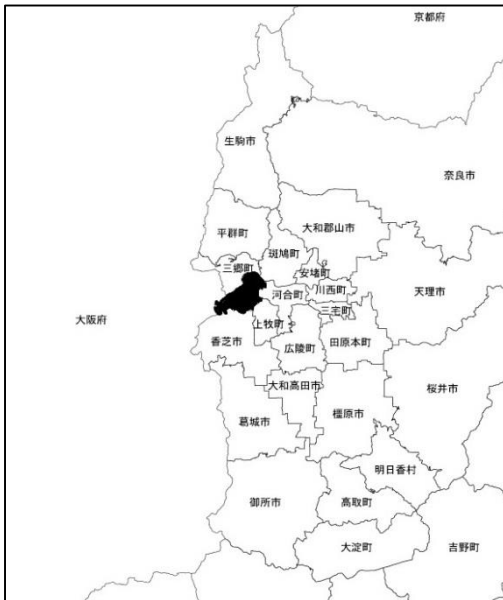


図1 王寺町周辺の地図

2. 「カシテ」の形式特徴

ここでは、「カシテ」の形式的特徴を記述する。2.1節で「カシテ」の生起環境について、2.2節で「カシテ」のもつ定型性について述べる。そして2.3節、2.4節でそれが生起する複文について述べる。

2.1. 生起環境

「カシテ」は、複文の従属節末に現れる。「カシテ」は従属節の述部が動詞・形容詞・形容動詞・名詞である場合、直接接続すると不自然さを感じさせる。また、形容動詞や名詞の場合、コピュラ「や」を後接することもできない。

(5) ??今晚雨が降るカシテ、歩いてる人みんな傘持ってはる。【動詞述語文】

(6) ??顔がいいカシテ、よく男の人に声かけられんねん。【形容詞述語文】

(7) 太郎は気性が穏やか {?カシテ/*やかシテ}、自然と周りに人が集まってくるな。【形容動詞述語文】

(8) あそこが目的地 {?カシテ/*やかシテ}、車はスピードを落とした。【名詞述語文】

「カシテ」は主に、「から」を介する、また準体助詞「ん」を用いてノダ文の形にすれば、動詞述語・形容詞述語・形容動詞述語・名詞述語のいずれでも生起可能である。

(5') 今晚雨が降る {からカシテ/んカシテ}、歩いてる人みんな傘持ってはる。

(6') 顔がいい {からカシテ/んカシテ}、よく男の人に声かけられんねん。

は別のものだと考えられる。

2) 筆者の居住歴は、以下の通り。0-6歳 奈良県橿原市 6-22歳（現在） 奈良県王寺町

(7') 太郎は気性が穏やか {やからカシテ／なんカシテ}、自然と周りに人が集まってくるな。

(8') あそこが目的地 {やからカシテ／なんカシテ}、車はスピードを落とした。

また、形式名詞「おかげ」「せい」「つもり」にも後接する。これらには直接つくことも、ノダ文の形をとって「～なんカシテ」というようにつくこともできる。

(9) さっき飲んだ薬のおかげ {カシテ／なんカシテ}、頭痛いの治ってきたわ。

(10) 昨日の怪我のせい {カシテ／なんカシテ}、彼は試合に出てけえへんかった。(出てこなかった。)

(11) あれで勉強したつもり {カシテ／なんカシテ}、あの子もうゲームしてるわ。

ただし、その他の形式名詞には後接しない。たとえば「おかげ」や「せい」と同じ「原因」を表す形式名詞であっても、「ため」には後接しない。

(12) 事故のため {*カシテ／*なんカシテ}、この先ずっと渋滞してるで。

また、「カシテ」が主節に現れることはない。ゆえに「カシテ」で文が終わることはない。

(13) *お母さんの機嫌悪いのは、わたしのテストの点数が悪かったからカシテ。

2.2. 「カシテ」のもつ定型性

「シテ」は必ず「カ」と合わせて生起する。したがって、「シテ」のみで使われることはない。

(14) 寒いん {カシテ／*シテ}、あの子もうコートを着てるわ。

(15) 明日から友達が泊りに来るから {カシテ／*シテ}、子供らは妙に浮かれてる。

また、「カシテ」の「シテ」は、以下のように敬語化、可能化することができない。

(16) 先生、今日、体調悪いん {*カなさって／カシテ}、ずいぶん早く授業終わったな。

(17) あの子は5歳なのにもう漢字が {*読めるんカデキテ／読めるんカシテ}、難しい本を1人で読んでるわ。

また、「カシテ」は間投助詞「ね」、および関西地域方言にみられる間投助詞「な」と共起するが、それらは「カシテ」に後接する形で現れ、「カねシテ」のように間に入っていない。

(18) わたしに原因があるん {カシテね／*ねカシテ／*カねシテ}、いつも恋人にふられんねん。

(19) わたしに原因があるん {カシテな／*なカシテ／*カナシテ}、いつも恋人にふられんねん。

以上の点から、「カシテ」はこの形で固定化し、定型性をもっていると思われる。

2.3. 「カシテ」が生起する複文の構造

主節の背景にある事態を述べる従属節が複数ある場合、「カシテ」は生起しない。そのような場合では、「カシテ」が1つでも複数でも不適格となる。

(20) *わたしが悪かったんカシテ、彼が悪かったんカシテ、あの子は怒って帰ってもうた。(帰ってしまった。)

(21) *わたしが悪かったんか、彼が悪かったんカシテ、あの子は怒って帰ってもうた。

(22) *わたしのせいカシテ、彼のせいカシテ、あの子は怒って帰ってもうた。

(23) *わたしのせいか、彼のせいカシテ、あの子は怒って帰ってもうた。

また、大きな「従属節—主節」という構造の中に小さな「従属節—主節」という構造が入れ子になっている場合であっても、主節の背景にある事態を述べる従属節が複数あれば、「カシテ」を用いることができない。

(24) *彼は怪我のせいカシテ試合に出られへんかったんかもしれんけど、遅刻のせいカシテ出られへんかったんかもしれん。

(25) *彼は怪我のせいカシテ試合に出られへんかったんかもしれんけど、遅刻のせいで出られへんかったんかもしれん。

(26) *彼は怪我のせいで試合に出られへんかったんかもしれんけど、遅刻のせいカシテ出られへんかったんかもしれん。

2.4. 使用可能な文タイプ

以下では、主節における使用可能な文タイプについて、対人的モダリティと対事的モダリティに分けてみていく。まず 2.4.1 節で主節に対人的モダリティが表されている文について、2.4.2 節で主節に対事的モダリティが表されている文について記述する。

2.4.1. 対人的モダリティ

「カシテ」は、主に主節が平叙文および確認要求文である場合の従属節に生起する。

(27) 今日は午後に雨降るからカシテ、朝からえらい曇ってんな。 【平叙文】

(28) 太郎はお化けが怖いんカシテ、肝試しにけえへんねやろ？(来ないんでしょう？)
【確認要求文】

命令文や質問文など、主節でその他の対人的モダリティが表されている場合には生起しない。

(29) *今日は午後から雨やからカシテ、午前中に何やとかなあかんの？
【疑問詞疑問文】

(30) *太郎はお化けが怖いんカシテ、肝試しにけえへんの？ 【Yes-No 疑問文】

(31) *今日は雨降るからカシテ、傘持って行つとき。 【命令文】

(32) *今日はお客さんが来るからカシテ、そんな格好すんな。 【禁止文】

(33) *学校に有名人来てるからカシテ、一緒に見に行こうや。 【勧誘文】

2.4.2. 対事的モダリティ

ここでは仁田(2009)で述べられている対事的モダリティ³⁾の下位分類を参考に、それらと「カシテ」との共起関係をみていく。

「カシテ」は「推量」や「伝聞」「疑い」と共起する。

(34) 最近授業をさぼりがちやったからカシテ、こんなに成績が落ちたんやろう。

3) 仁田(2009)では、「命題目当てのモダリティ」とされている。

【推量】

(35) 最近授業をさぼりがちやったからカシテ、あいつだいで成績落ちたそうやで。

【伝聞】

(36) 最近授業さぼりがちやったからカシテ、こんなに成績落ちたんかな。 【疑い】

次に、「蓋然性判断」との共起関係をみる。「カシテ」は蓋然性判断の中でも、「かもしれない」とは共起可能であるが、「にちがいない」とは共起しにくい。

【蓋然性判断】

(37) 味が悪かったからカシテ、あのレストランは潰れてもうたんかもしれん。

(38) ?味が悪かったからカシテ、あのレストランは潰れてもうたんにちがいない。

「カシテ」は「当為評価のモダリティ」とは共起できず、「徴候性判断」とは共起しにくい。

【当為評価のモダリティ】

(39) *明日テストあるからカシテ、勉強せんなあかん。

(40) *明日テストあるからカシテ、勉強するべきや。

(41) *明日テストあるからカシテ、勉強したほうがええ。

【徴候性判断】

(42) ??明日テストがあるからカシテ、弟は一生懸命勉強してるようや。

(43) ??明日テストがあるからカシテ、弟は一生懸命勉強してるみたいや。

3. 「カシテ」の意味・用法

本節からは、「カシテ」の意味・用法について記述していく。

「カシテ」の意味については、以下のようにまとめられる。

(44) 「カシテ」は、話し手が主節の背後にあると考えられる事態の候補から、その主節事態とのつながりの不確かさを念頭に置きながらも、話し手の主観に基づいてある1つの事態を選んで背景事態として提示していることを表す。

以下、本節においては、「従属節と主節の結びつきの不確かさについて」と「ある1つの事態を選ぶという点について」の2点に分けて詳述する。まず3.1節において前者について述べ、次に3.2節で後者を説明する。また3.3節および3.4節では、モダリティとの共起関係の制限を、「カシテ」の意味・用法と合わせて考える。

3.1. 従属節と主節の結びつきの不確かさについて

1節で述べたとおり、「カシテ」は話し手にとって従属節が主節の背景にあることが明確な場合には、用いることができない。

(45) (雨に濡れながら帰ってきた子供が、家で迎えてくれた母親に向かって)

#急に降ってきたからカシテ、びしょ濡れやで。 ((4) 再掲)

自らが経験しているのだから、びしょ濡れになった理由が急な雨にあることは、話し手にとって確実である。つまり主節事態と従属節事態が、もともと1対1の関係で話し手の頭の中に存在しているのである。そのため、「カシテ」は用いることはできない。一方で、以

下のような場合では、「カシテ」を用いることができる。

- (46) さっき駅前で、太郎にばったり会ってん。プールでも行ってたんカシテ、髪の毛めっちゃ濡れてたわ。

この場合、太郎の髪の毛が濡れていた理由を話し手は知らない。会う前にプールに行っていたのかもしれないし、友達にいたずらで水をかけられたのかもしれない。つまり主節の事態をもたらしたと考えられうる事態が複数あり、どれが主節の事態と結びついているのか定かではない状況である。これらの例から、「カシテ」が用いられるとき、話し手には主節の背景にありうる事態として複数の事態があることが把握され、従属節事態と主節事態の結びつきは不確定性を持って捉えられていることがわかる。

また、同様に不確定性を有する推量形式を用いても、これを示すことができる。そのために、モダリティの1つとして「推量」を論じている仁田(2009)を参照する。仁田(2009)は、推量を「命題内容である事態の成立・存在を不確かさを有するものとして、想像・思考や推論の中に捉えるものとし、推量の表す、事態成立を不確かさを有する・確かさに欠けるものとして捉える、といったことの内実は

- (47) まだ到着しない、何かあったんだ。きっとそうだ。

- (48) まだ到着しない、何かあったんだ。#きっとそうだろう。

が示してくれるだろう。(仁田 2009:132)」と述べている⁴⁾。後者が逸脱性を有する理由については、先行文が「事実としての確認はまだ済んでいないものの、命題内容として描き取られている事態の成立・存在を、想像・思考や推論の中ではあるが、確かなもの・その事実性を主張しうるものとして捉えている。一度、確かなもの・その事実性を主張しうるものとして捉えておきながら、すぐさま、その確かさ・事実性の主張を放棄し留保することは、論理矛盾になる(仁田 2009:132)」からであると述べている。

「カシテ」が不確かさを有するものとして従属節事態を表すことも、同じように示すことができる。

- (49) やっぱり彼は私がバレンタインデーにチョコを渡し忘れたことを怒ってるんや。
怒ってるから、メール返ってけえへんねん。(返ってこないんだ。)

- (50) #やっぱり彼は私がバレンタインデーにチョコを渡し忘れたことを怒ってるんや。怒ってるからカシテ、メール返ってけえへんねん。

それぞれの1文目で、話し手は「彼が怒っている」ということに注目し、「メールが返ってこない」ことの原因となり得る確かな事態として頭で捉えている。しかし後者は続く文で、「カシテ」によってその事態は複数ある候補のうちの1つで、主節とのつながりも不確かなものであると捉えなおしているために、矛盾が生じて不適格となっているのである。

ゆえに、同様の文でも以下のような場合では使用可能となる。

- (51) A: 昨日、太郎、あんたにえらい文句言って帰っとったけど、あれから連絡あった?

B: いや、メールしてみたんだけど、怒ってるからカシテ返ってけえへんねん。

4) 下線は原文ママ。例文番号は本稿での順番に合わせて変えている。

この場合では、話し手に「帰った後の太郎がどうなったか」についての知識はなく、「メールが返ってこない」ことの理由となりうる事態に複数の候補が考えられる。そのため「カシテ」によって、『太郎が怒っている』という事態は数ある理由の候補のうちの1つにすぎず、主節事態と従属節事態とのつながりが不確定である」ことが表されても、矛盾は生じないのである。

以上より、「カシテ」によって「話し手が従属節事態と主節事態とのつながりが不確定であると捉えていること」「主節の背景事態には複数の候補がありうると捉えていること」が示されていることがわかる。

3.2. ある1つの事態を選ぶという点について

次に、「カシテ」によって話し手が「(不確定性は念頭に置きながらも) ある1つの事態を選んで、背景事態として提示している」という点について説明する。これは、「カシテ」が並列を許さない、ということによって示される。そのために、まず共通語における「～のか、～」や「～からか、～」といった不確定性を表示する形式についての先行研究を参照する。日本語記述文法研究会編(2008)によれば、「**「からか」「ためか」「せいか」「おかげか」**は、従属節の事態が主節の事態の原因・理由であることが不確定であること(日本語記述文法研究会編 2008:145)」を示す一方で、「**「のか」**は、従属節の事態の成立が不確定であること(日本語記述文法研究会編 2008:145)」を表すとされている。これらの違いについて、以下に例を挙げる。

(52) 事故があったからか、道がすごく混んでいた。

(53) 事故があったのか、道がすごく混んでいた。

(52) は、「道が混んでいた」理由が「事故があったこと」であるかどうか不確定である。一方で(53) は、事故があったのかも不確定となっている。

これについて安達(1995)は、前者は並列が見られないのに対し、後者は「～のか、～のか、～」のように並列されることがあると指摘している。

(54) ?先生に怒られたからか、友達と喧嘩したからか、彼は今日機嫌が悪い。

(55) 先生に怒られたのか、友達と喧嘩したのか、彼は今日機嫌が悪い。

安達(1995)は、「～のか」という節は話し手にとって真偽が確定できない事態を設定する表現であるので、主節事態の背景には複数の候補があっても構わず、並列が可能になるのだと述べている。一方で、「からか」などは、1つの候補としてその従属節事態と主節事態の組み合わせを選択したことになるので、並列は許されないであろうと述べている。

ここで「カシテ」を考えると、「カシテ」は従属節が複数ある場合には用いることができない。すなわち、並列が許されない。これは、「カシテ」が準体助詞「ん」に後接した時もその他のものに後接した時も同様である。

(56) *わたしが悪かったんカシテ、彼が悪かったんカシテ、あの子は怒って帰ってもうた。
(20) 再掲

(57) *わたしのせいカシテ、彼のせいカシテ、あの子は怒って帰ってもうた。
(22) 再掲

これは、「からか」などが特定の従属節事態と主節事態の組み合わせを選択しているのと同じく、「カシテ」が特定の事態を選んで、背景事態として提示しているためであると思われる。

このことは、原因を表す形式名詞の中でも、「カシテ」が「おかげ」「せい」とは共起するが、「ため」とは共起しないことが根拠となりうる。

(58) さっき飲んだ薬のおかげ {カシテ／なんカシテ}、頭痛いの治ってきたわ。

((9) 再掲)

(59) 昨日の怪我のせい {カシテ／なんカシテ}、彼は試合に出てけえへんかった。(出てこなかった。)

((10) 再掲)

(60) 事故のため {*カシテ/*なんカシテ}、この先ずっと渋滞してるで。

((12) 再掲)

このように、「カシテ」は「ため」のような客観性が強い形式名詞とはむすびつきにくく、「せい」「おかげ」のような主観性が強いものとは共起しやすい。これは「カシテ」がただあり得る事態を提示しているのではなく、話し手の主観に基づいてある1つの事態を選んでいる形式であるためだと思われる。

3.3. モダリティとの共起関係の制限と「カシテ」の意味

ここではモダリティとの共起関係の制限について考察する。2.4.1 節で、「カシテ」は主節が平叙文・確認要求文以外の対人的モダリティを表す文には生起しないことをみた。言い換えると、「カシテ」が生起する文としない文との違いは、話し手が聞き手に対して何らかの行動を期待しているか否かにあるということである。例えば命令文ではその事態の実現を、禁止文ならその事態を実現しないことを期待している。逆に「カシテ」が用いられる際、話し手は聞き手に行動を期待しているのではなく、あくまで自らの「不確定要素の表出」に重点を置いているのだと考えられる。2.4.2 節で「当為評価のモダリティ」だけが明らかに不適格とされたのも、これと同じ理由である。仁田(2009:101)では、「なければならない」「べきだ」などの形式は、「事態に対して、その実現を当然であり義務的であるものとして捉えたり、その実現が推奨されたり認められたりするものとして捉えたりする、といった事態実現に対する当為・評価的な捉え方を表したものである。あるいは、事態が当然性・評価性を帯びたものとして存在していることを表したものである」と述べられている。ゆえに当為評価のモダリティが用いられると、話し手がその事態の主体に対して、事態の成立を期待する態度が生じる。これは、不確定性の表出に重点を置く「カシテ」と反発しあう態度であるため、共起ができないのだと思われる。

以上のように考えると、聞き手に確認という行動を期待する確認要求文に「カシテ」が生起できることは、一見矛盾しているように思われる。しかしこれを「不確定性を表示することで得られる間接的な用法」と考えれば、なんら矛盾しなくなる。それを示すために、「だろう」の「推量」から「確認要求」への意味拡張について述べた、三宅(2010)を参照する。三宅(2010)は「だろう」に「推量」「命題確認の要求」「知識確認の要求」という複数の用法があることについて、『プロトタイプ』に基づくアプローチと『スキ

一マ』に基づくアプローチ」という2つを用いて論じている。その中で、「推量」と「命題確認の要求」の拡張関係は、「ダロウによる「命題確認の要求」は、命題が不確実であるという、命題の確認を要求するということの必要条件を聞き手に表明することによって、間接的に得られる用法であると考えられる。」(三宅 2010:47) と述べている。

「カシテ」が用いられる複文においても、同じことが起こっていると考えられる。

(61) あいつ宿題やってないからカシテ、学校休んでんねやろ？

この例においては、「カシテ」と「やろ(だろう)」によって、確認要求の必要条件である「『宿題をやっていないから学校を休んでいる』ということが不確定であること」が聞き手に表明されている。それによって、間接的に確認要求という用法が得られるようになる。これはあくまで不確定性を表示することで間接的に生じている意味であるため、「カシテ」の使用も不適格とはならないのである。

4. まとめと今後の課題

ここまで、王寺町方言における「カシテ」についての記述を行った。まとめると以下のようになる。

- A) 「シテ」は必ず「カ」とともに「カシテ」の形で現れ、接続助詞「から」や準体助詞「ん」、「おかげ」「せい」「つもり」という形式名詞に後接する。
- B) 「カシテ」は、主節の背景にある事態には複数の候補があり、また従属節事態と主節事態とのつながりが不確定であると話し手が捉えていることを示す。
- C) 「カシテ」は、話し手が不確定性を念頭に置きながらも、ある1つの事態を選んで、背景事態として提示していることを示す。
- D) 「カシテ」は聞き手に何らかの行動をすることを期待せず、あくまで「不確定性の表出」という点に重点を置く。

今後の課題としては、「カシテ」を共通語の「か」と対比して考えていくことが必要であると思われる。また、より細かく共起の可否をみることで、「カシテ」とモダリティとの関係についても考えていく必要がある。さらに本稿では触れることができなかったが、「カシテ」は非難やからかいといった表現に使用しやすいように感じられる。その点についても、より詳細に記述していかなければならない。

【参考文献】

- 安達太郎(1995)「カ」による従属節の不確定性の表示について」仁田義雄編『複文の研究(上)』pp.247-263, くろしお出版.
- 徳川宗賢監修尚学図書編(1989)『日本方言大辞典』小学館.
- 仁田義雄(2009)『仁田義雄日本語文法著作選 第2巻 日本語のモダリティとその周辺』ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会編(2008)『現代日本語文法6 第11部複文』くろしお出版.
- 三宅知宏(2010)「「推量」と「確認要求」—「ダロウ」をめぐる—」『鶴見大学紀要 第1部 日本語・日本文学編』47, pp.9-55, 鶴見大学.

やまがみ みこと（大阪大学学部生）

u341664e@ecs.osaka-u.ac.jp